
豊臣秀長 長寿伝

岩根 正和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

豊臣秀長 長寿伝

【Nコード】

N6693I

【作者名】

岩根 正和

【あらすじ】

天正18年豊臣秀長、原因不明の病に倒れる！！

しかし、その裏には戦国一の律儀者徳川家康の影が・・・。

豊臣政権を虎視眈々と狙う家康から、秀長は守れるか？

豊臣秀吉が晩年、人心を離れさせる事を次々としていくのは、秀長が亡くなってからだと言われています。

。秀長の寿命が延びて、どの様に戦国の世が変わっていくのか・・・

プロローグ（前書き）

はじめまして、はじめて投稿させていただきます。

なんせ、若輩者なので、文章の稚拙な点や、時代考証等、大目に見ていただければ幸いです。

プロローグ

従二位権大納言 豊臣秀長……。

彼は、兄太閤秀吉に無くてはならない数少ない肉親であり、補佐役であり、裁量権を任せられる優れた部下でもあった。

そんな秀長は天正18年（1590年）1月頃から病が悪化して行く。

秀長は、自身と同じ官位を持つ徳川家康より長寿の秘伝を教わっていたが、（家康は健康に対する執着が凄く、漢方医でさえ舌を巻く知識を持っていたと言われている）どうも、病は酷くなる一方であった。

天正18年10月に甥の豊臣秀次が秀長の病氣本復を祈願のため談山神社に訪れるのだが、そこで、秀次は草（忍び）流から驚くべき報告を受ける。

ここから物語が始まります……。

陰謀の匂い

流は秀次につかえる草で、主に徳川家の情報収集を担当とする忍びである。

普段は、徳川家康の居城である駿府城に送り込んである、女中達からの情報を精査し、主君に報告するという任務についているわけなのだが……。

『どうも、武蔵大納言（家康）が調法している生薬に毒物が混入しておるとの事で有ります。』

報告を受けた秀次は、驚きの表情とともに、やはりとも取れる表情を見せ、

『うゝむ、武蔵大納言はやはり豊臣の生命線をついてきたか……。

』

少し影のある表情をさらに深めていく……。

『秀次様！このままですと大和大納言様（秀長）のお命もいずれ尽きてしまいまする！！』

流が自身のもたらした情報が、どのような流れを生むのかを勿論分かっている。

『しかし、相手は武蔵大納言、確証も無いままに詰問もできん。まして、関白様に知れたら、怒り狂い太平の天下を再び戦乱に巻き込みかねん……。』

というのが、当時生薬として扱われていた辰砂という物は、あの水俣病の原因にもなった水銀なのである。

これを大量に摂取すると体に害が出ると、自身が無類の女好きで、梅毒持ちの家康には分かっていた（当時水銀は梅毒の薬として、明治期まで広く伝わっていた。）

であるから、生薬の処方を教えて何が悪いと開き直られるのは間違いない。

秀次は共周りを引き連れ馬を駆った……。

そう、116万石の大大名であり、寺社勢力の苛烈な大和、紀伊、和泉を治め、「内々の儀は宗易（千利休）、公儀の事は宰相（秀長）存じ候」と南海道の雄、大友宗麟を感激せしめた、自他共に認めるゆるぎない豊臣政権の？2 従二位権大納言 豊臣秀長の居城、大和郡山城に。

東海の狸（前書き）

家康登場です。

家康が秀長をなぜ邪魔であると思ったのか、そこを書いてみました。

次回から仮想モード突入です。

東海の狸

駿河国駿府城、ここに本拠を置く東海の覇者徳川家康、もう一人の大納言である。

『とうとう、北条の命運も尽きてしまうな……。』

家康は碁を打つ向の男にそうつぶやいた……。

『北条の負けは間違いないでしょうな。しかし関白は相模を我らに下さるのでしょうか？』

逆に、神経質そうで細面な顔つきの男が聞き返す。

『まあ、戦後加増は間違いないだろうよ。但し、食えない御仁だからなあ、殿下は。』

食えない事に関しては、負けず劣らずの家康はにやりとした笑みを湛えて、必勝の一手を打つ。

『むむむ！これは……参りました！』

悔しさを滲ませながら男は頭を下げる。

この男の名は本多正信と言い、家康が「友」と呼ぶ数少ない心を許せる男である。

正信が間を置き、人からするとまったく訳の分からない一言を家康につぶやいた。

『武田ですな……。』

この人は家康にしか分からない事をつぶやく。

『うむ。』

武田の意味とは？

それは信長の時代に遡るのだが、当時、信長は武田勝頼に甲斐領地安堵の条件で、降伏勧告を送っている。

しかし、勝頼はその条件を突っぱねる。

長年甲斐を狙っていた家康は、甲斐より進行し、美濃より攻め入った織田勢と共に甲斐武田家を滅ぼしたのである。

その後当然、甲斐は家康が貰えるものと思われていたが、駿河を与えられ、甲斐には自身の腹心である、河尻秀隆に与えられたのである。

しかし、この河尻秀隆が武田狩りといわれる、過酷な武田家遺臣を弾圧したために、（信長の意向が強く反映されたものと言われている）本能寺の変後、残党の一揆により殺害される事になる。

このとき武田家遺臣団を保護し、後に召し抱えたのが、家康であり。河尻秀隆の支援、穴山梅雪の所領警護の名目で甲斐を占拠した経緯がある。

これらの事は当然、家康、正信両名の画策した事であるが、北条家との領地争いも視野に入れていたのだが、一つ誤算があった、【真田家】の存在である。

真田との狭間で北条と徳川が争い、支配権争いにより家康は真田昌幸に痛い目を見せられ、天正壬午の乱を経て、小田原の役に繋がるのであるが・・・。

なにわともあれ、家康にとって、北条領の一部が転がってくるのは間違いないとの読みである。

『まあ、北条家に恩を売つという損はないよ。後々の事を考えてもな。』

家康は信長、秀吉と、臣従しながら沢山の事を学びとっていた。

やりすぎは後に禍根を残す……。やるなら徹底的に禍根を根絶やしにする。

自身が秘めたる野心の邪魔になるものは排除していかなければならない。

『秀吉なぞ秀長あつての物ぞ、信玄公に信繁あつたように、儼にも支えてくれる優秀な弟がおれば……。』
家康は正信にも聞こえない心の声で呟いているのである。

親族を早くに失い、自身を支える兄弟の居ない家康にとって、自身が秀吉に負けているのは、秀長という存在が自分には足りないだけだとの思いを抱いていたのである。

『そろそろ大和の明りも消えましょう……。』
正信のつぶやきに、家康は口元を醜くゆがめた。

大和の光

大和郡山城内では、駆けつけた秀次、流、側近の田中吉政を連れ、臥せっていた秀長に事実を伝えた。

『なるほど……。家康殿の秘薬が体調不良の原因とは……。』
秀長は最近よだれが自然にこぼれ、健康時の透き通った声が聞こえにくい。

『さよう、南蛮では水銀が毒性が強いとの意見が出始めており、これ以上の服用は危険かと！』
秀長とは旧知の仲である、吉政が文官らしからぬ声を張り上げる。

先ほどから医者と秀次達が薬の毒性について議論がつかずに紛糾していた……。

『では、一時薬の服用を一切やめ、精の付く食事療法に切り替えられては？』

秀長の側近で、秀長の右腕として辣腕をふるっている、藤堂高虎が議論の一瞬、空白が空いた間に絶妙な合いの手を入れてきた。

正五位下 藤堂佐渡守高虎、徳川家康の側近本多正信と同じ佐渡守の官位を持つもう一人の佐渡守……。
もともと、正信の場合は従五位下であるから、高虎の方が格上ではあるが……。

そして、大和大納言秀長に武蔵大納言家康。
秀長と家康の奇妙な共通点である。

『されど、憎きは家康！律儀者の仮面いつか剥ぎ取らん！！』

高虎は怒りに震えていた。

史実では家康に媚を売る代表格であるが、自分より能力があり、正当な評価を与えてくれるものに仕えているだけで、この時の彼にとって、理想の主君、命を賭けられる主君は秀長以外居ないのである。

『高虎、家康は決して兄じやの目の黒いうちは絶対に動かん……。だから待て！時が来るのを！狸の皮をかぶった虎が出てくるのを待つんじゃ……。』

秀長は家康の意図に気付き、自身の肩に背負った物の大きさを、絶対に生き抜くという精神力に変えたのであった。

それから、秀長は、信玄公が食したとされる、栃餅にはちみつをかけた通称【信玄餅】を好んで食べたのだした。

もともと水銀の毒は、蒸気になって摂取しなければ、自然と体外に排出される。

2週間もしないうちに秀長の体調が劇的に回復してきたのである。

『このままいけば、兄じやの陣触れに間に合うなあ』

この働き者の秀長は、もう自身が倒れる前に出た北条討伐に参加する気である。

秀長が出陣の決意をしたのは、家康は元々北条家と同盟関係にあり、戦況によっては、豊臣家に臣従をしていない、伊達などの勢力と結託して、返り忠しかねない存在である。

この事については、当然秀吉も用心しており、秀次を大将とした、軍に組み込み、自身は別に軍勢を組んでの着陣である。

『すでに動員は完了しております。』

そばに控えていた杉若無心がささず答える。この頃は主だった武将達は領地に戻り、動員の準備に追われていた。

天正18年4月には、豊臣側の動員はほぼ終了しており、北方軍、前田利家、前田利長、上杉景勝、真田昌幸、依田康国、丹羽長重らが率いる約3万5千人。

水軍率いる長宗我部元親、加藤嘉明、九鬼嘉隆、脇坂安治の兵力約1万人。

主力に至っては豊臣秀次を筆頭に、徳川家康、織田信雄、蒲生氏郷、黒田如水、羽柴秀勝、宇喜多秀家、織田信包、細川忠興、小早川隆景、吉川広家、堀秀政、池田輝政、浅野長政、石田三成、長束正家、長谷川秀一、大谷吉隆、石川数正、増田長盛、金森長近、筒井定次、生駒親正、蜂須賀家政、大友吉統、島津久保、森忠政等、実に約17万人をも動員しているのである。

当然これには、関白秀吉軍は含まれておらず、正に秀吉の権威を天下に見せつけるに相応しいイベントとなったのである。

そして、秀吉を狂喜させたのが、自身が最も信頼し、どんな命令もそつなくこなす、もつとも優秀な家臣、豊臣秀長が2万の大軍を率いて、出陣したのである。

小田原の役？（前書き）

小田原の役突入します。

今回は官兵衛さんが初登場です。

小田原の役？

秀長が出陣する4月までの流れをおさらいしておきます。

先ず、2月10日に徳川家康が小田原攻めに向け二万の軍を率いて駿府を出陣、同28日に宇喜多秀家が小田原攻めに参陣、3月1日豊臣秀吉が、小田原へ向け3万2千の軍を率いて京都を出陣、同27日秀吉が駿河三枚橋城に到着、この時に津軽三郡・合浦の領主、津軽為信単身十八騎を率いて参陣し、領地の支配権を認められます。

そして、4月6日豊臣秀吉が早雲寺に本陣を置き、北条氏政・氏直親子の籠もる小田原城を包囲したのである。

秀吉本陣にて・・・。

『なんと！小一郎（秀長）が、参陣すると?!!!』

この頃の秀吉は、間違いなく戦国一のキレ者であり、他者に付け入る隙をまったく与えない、軍略家であり戦略家、そして策略家であった。

『はは！秀長殿、大和より出陣、遅くとも10日後には着陣出来ますかと。』

黒田官兵衛は、控え目に、しかし抑えきれない喜びの感情が声に出て、秀吉に報告をする。

この人は、秀吉の与力として（当時、官兵衛は信長の家臣）羽柴家の内情を知る官兵衛は、豊臣秀吉という人が、秀長という人間が豊臣政権に無くてはならない人であると、つくづく実感していた。

『官兵衛よ、これで、家康殿には楽にしてもらえるのぉ』

含みのある秀吉の言葉に官兵衛は、

『はっ、何やら先を見据えた動きが目に残り増す狸ゆえ、少し下がっていただきましょうか。』

官兵衛は家康の意図を読み切っている。

というのは、北条の豪族たちに接近し、これからの運営を見据えた露骨な動きが活発になっている。

『これ、官兵衛！豊臣を支えてくれる家康を狸と申すとは、言葉が過ぎるぞ！』

笑いつつも官兵衛をたしなめる。

秀吉は家康を当然警戒はしている、が、それは家康を含んだ三河者全てであり、個人的には、そばで控えるこの官兵衛を一番恐れていた。

当然、官兵衛もこの事は良く踏まえていて、前年天正17年、家督を嫡男長政に譲り隠居、「如水軒」と号したのである。

『いやいや、関白様、このような隠居者とは違い、家康殿は食えぬ狸でございますぞ、何せ、裏ではいまだに氏直と連絡を密にしておる様子……』

お前も食えぬ狐であろうと、心で毒づき、秀吉がつぶやく……。『久しぶりに小一郎と茶でも立てながら、ゆっくり語り合いたいの……。』

この天下人は、北条攻めなど、豊臣政権の強大さを諸侯に見せつけるだけのイベントぐらいにしか思っていないのである。

その頃、官兵衛が狸と呼ぶ家康はというと、

『おおお！大和納言ご回復誠に祝着、祝着、』
と、諸侯の前で派手に喜んで見せていた。

腹の中では言葉では説明できない憎々しい物が蠢いているのだが・・。

この、我慢を人間に表わしたらこうなった、と、我慢我慢の男、家康はおくびにも出さずに、

『これでこの戦、益々我らが万に一つも不覚をとる事などないだろうよ！』

などと、諸侯の景気を煽っているのだから大したものである・・。

この後、家康は正信と2人で密談を始める・・・。

黒い陰謀の塊が2人の空間を支配する。

行燈の光を通して壁に写る家康の姿は正に、見た目は愛くるしく滑稽であるが、敏捷で賢く、どのような餌でも自身の血肉に変えてしまいう狸の様である。

4月15日、豊臣秀長が、秀吉の本陣に到着。

小田原の役？（後書き）

当時、秀吉は実際家康さんより官兵衛さんを読み切れていなかったみたいです。

秀吉さん、史実通りに壊れた人にしようか、考え中w

小田原の役？（前書き）

感想に水軍について触れていましたので、早速取り入れました。
節操のない筆者でありますw

小田原の役？

戦国時代が一番早い移動手段は、水上移動である。

当時のいわゆる海賊というのは、水上運搬の護衛や、委任交易、湾岸襲撃など、商人や大名と緊密な関係を築いてきた。

織田信長の時代に、志摩の守護職であった九鬼氏出身の九鬼嘉隆を臣属させ、水軍を編成したのである。

これは、大名が自身で水軍を持つという画期的な出来事であった。（有名な毛利水軍も当時は厳密には存在せず、村上水軍という、独立勢力であった。）

そして、水軍の独立性は、秀吉が海上賊船禁止令を發布し、水軍の収入源であった通過商船の有償護衛などの活動を海賊行為として禁止し、海賊たちに領主の支配に服することを命じた。

これにより、海賊衆は陸上に生活拠点を移していった。（当時は水上が荒れない限り海賊衆は船上で寝泊まりをしていた。）

秀長は紀伊を治めており、田辺別当家の流れをくむ、熊野水軍を傘下に治めていた。

豊臣秀長、116万石の大名である、和泉、紀伊、大和3力国を治めるその家臣も、大名クラスの所領を預る者も多い。

有名どころでは、紀伊国田辺1万9千石を預る杉若無心、紀伊粉河2万石は藤堂高虎、紀伊和歌山3万石、和歌山城城代桑山重晴、大和高取城主となり2万5千石を領する、本多利久、大和5万石は横

浜一庵、大和小泉城主4万8千石は羽田正親、有名どころは、大和1万石、島左近（この人、有名な割に一次資料が少ないです。）など、ご存じな方も、初耳な方も居られるかと思いますが、代表格の家臣団です。

当然、秀長が存命であれば、彼らは秀長配下として参陣する事になります。

熊野水軍を率いる杉若無心、軍監に藤堂高虎（史実でも、無心の水軍術を学んでいる）約1万。

天正18年4月15日、秀長率いる陸路1万人の総勢2万人の秀長勢が相模国、早雲寺に着陣する。

ここで秀吉、秀長兄弟は約1年ぶりの再会を果たす。

はしゃぎ、目には涙が溢れ、秀長の両手を握りしめ、

『小一郎よ……。よう病から……。床から出れたのう……。よう回復した……。祝着じゃ、祝着じゃ……。』

秀吉は顔をくしゃくしゃにして、何度も秀長の手を力一杯握りしめた。

決して、人前では弟といえども家臣の形を崩さず、兄を立てる弟は、『関白殿下！ご心配をおかけいたしました。この秀長、殿下の天下統一最後のお手伝いいたしますぞ！！』

そして、秀長は、

『殿下、誠に厚かましい願いでございますが、快気祝いをお願いしたき事がございます。』

おお！と、秀吉は笑顔で何度も何度も頷き、

『なんでも申せ、なんでも申せや。』

『こたびの北条攻め、小田原城攻略先陣、秀長に仰せつけください
ますようお願いいたします。』

秀長は北条攻めの、正に一番の肝を自分に任せてほしいと願い出た
のであった……。

小田原の役？（前書き）

少し視点を北条家に移してみました。

小田原の役？

天正18年4月15日現在、すでに北条方、松山城、松井田城、箱根山中城など、北条の拠点が次々と豊臣軍に攻略されていた。

海上はすでに豊臣軍によって封鎖されている。

北条家当主、北条氏直は、今回の戦はまるで勝ち目のない事を悟っていた。

『もはや是非もなしか……。』

この所、氏直は独り言が多い。

日ごろの心労が、若くして家督を継ぎ、嫌、継いだのはいいが、実質、父の氏政が、北条の実権を握っていると言っても過言ではない。そんな、北条家の構図が今回の戦を引き起こしたのかもしれない。

だが、今回の北条攻めは、秀吉に難癖をつけられたようなものである（氏直は名胡桃城を乗っ取ったのではなく、すでに真田家に返還し、真田方の名胡桃城主中山九郎兵衛の書付を進上するので真理を究明してほしい旨を、秀吉側近の津田信勝、富田知信に対して弁明するとともに、徳川家康に対しても執り成しを依頼した。そもそも、秀吉が調停し、北条が領有した沼田城からは3kmほどの距離で、目と鼻の先の距離。沼田城を領する北条家から見ればまことに都合が悪く、後に禍根を残すのは火に油を注ぐのを見るより明らか。）

このような経緯もあり、和解の道を探っていた氏直であるが、父である先代隠居、氏政の策謀で北条氏邦が宇都宮に侵攻していることから、申し開きも不可能になり、豊臣軍迎撃の準備を始めた。

北条家の主戦派部将達は、小田原城が力攻めで落とす事を不可能だ

と考えていて、有利な条件で講和し、豊臣家中の徳川家の様なポジションを狙っていたのではないかと思われる。

実際、豊臣軍諸侯の中にも、小田原城を攻め落とすのは難しいのでは？と、腹の中では考えている者も多かったらしい。

確かに支城、拠点は落とされるであろう、が、本体である小田原城が落ちるわけがない。

家中の意見が、2つに分かれているだけにタチが悪い。

これが、並みの城であれば、恐れおののいて、とつくに降伏論で統一出来たであろう。

しかし、この小田原城、城本体のさらに外側に全周約9キロメートルもある大外郭を設けて城下町をも包み込み、いわゆる「総構」と呼ばれる城塞であった。

なんせ、秀吉が建設した大阪城より、規模の大きい『巨城』なのである。

しかし、秀吉が小田原を包囲すると、家中の士気はかなり落ち込んだ。

何せ、上杉謙信、武田信玄ら、歴戦の兵を追い払った要因の一つである、『国もとの心配』が秀吉軍にはない。

古今東西、援軍の無い、孤立無援の状態で、大軍の包囲を打ち破った例は無いと断言できるほど皆無である。

しかも、率いる豊臣秀吉という男、築城、城攻めにおいて、正に戦国最強と言っても過言でない男が指揮を取っている。

今回の戦には、秀吉の弟である、豊臣秀長も参加していると聞いて、氏直な絶望に近い思いを抱いていた。

この秀長という男は秀吉をのぞいて、10万人規模の戦略指揮を執った日本の歴史で数少ない人物である。

しかも、兄の影に隠れているが、滅法に調略、合戦が上手い。

兄にも通じるのであるが、この兄弟は、戦術単位では、負けても、大局の戦略戦では無敗である。

あの家康でさえも、小牧・長久手の戦いでは、諸戦闘では勝ったが、最終戦略戦では完敗である。

当然、氏直は戦闘そのものより、自分たちの気付かない内に戦が終わってしまうのではないかと、思いを巡らせているが、どうにもならない絶望感だけが、湧きあがり、腹の中を痛みが襲ってくる。

『おるわ、おるわ、蟻んこの様ではないか。』

城下を囲む人の群れ、さながら蟻の様であると、氏直はつぶやいた。

氏直の眼下には秀長の馬印である赤染め一色白熊の馬印がぼんやりと目に写った……。

小田原の役？

春に向かったの、清々しい寒さが、人々の感性を研ぎ澄ましていく。草花には少しづつ緑の若々しさが、みずみずしく匂っていた。

だが、ここは間違いなく戦場であり、完全武装の足軽達や、鎧武者がいなければ、まったく日頃の日常と変わらない相模の風景である。

戦国期の4月中旬はまだまだ寒く、しかし、日差しが気持ちいい。

北条家の菩提寺である早雲寺、ここは関白豊臣秀吉が北条攻めの総指揮を執る本陣である。

早雲寺には秀吉を筆頭に、豊臣秀長、豊臣秀次、徳川家康、黒田官兵衛、宇喜多秀家、織田信雄、蒲生氏郷、小早川隆景、堀秀政などそうそうたる面子が参加し、議論が行われていた。もちろん小田原攻めについてである。

近頃、秀次は、秀長を謀殺しようと企んでいた家康に喰ってかかってしまう。

まあ、叔父を亡き者にしようとしていた家康なんかは、この場で斬ってしまいたい位である。

何とかその感情は抑えているのだが、いかんせん若さがつい、この若者を感情的にさせてしまうのである。

そして、今日も、流（秀次お抱えの忍び）が掴んできた情報を家康にぶつけていた。

『家康殿は逃げ込んできている北条の者を駿河にて匿っているとか？』

家康は秀次の詰問に大げさに驚いて見せ、

『秀次殿、徳川は国境を北条と繋がっております。関白殿下の天下に向けての大戦、民も不安で逃げ出すでしょうよ、これも、日頃より慈悲深い関白殿下を慕うての事ではござらんか。』
と、悪びも見せずに、答える。

はてさて、と、驚いたように秀次は、

『家康殿は、もう北条を下した後の事でも考えておるのではないのですか？』

と、少しでも家康の野心を引っ張り出したい。

しかし、この人は、自分が敵わないと思った者の前では、野心の素振りなど出さず、むしろ従順にて、戦国一の律儀者で通っていたのである。

古くは織田家の人質時代、今川義元の人質時代を経て家臣として、常に先陣で三河衆はすり潰され、織田信長の同盟時代は、同盟と言いながら、実情は従属関係を耐えて、やっと自分の時代かと思ったら、秀吉にほとんど何も出来ないままに天下をさらわれたのである。実は、家康は本能寺の変が起こるのを予見していたのではないかと、思われる行動を多々起しているのである。
嫌、実は明智光秀の後ろで糸を引いていたのは家康ではないのか？ 今回の件で、秀次はそんな疑いも持ち始めている。

そんな事を思われているなど、知ってか、知らずか家康は、

『嫌々、流石は秀次殿！この家康の意図を読んでおられる！』

と、たいそうに驚いた後、

『当然後の関白様の置きし易き事！』

と、大見えを切って見せた。

そして、秀次がさらに咬みつこうとした時、秀吉が、

『うむ！流石は武蔵大納言！！よう言った！よう言った！余は、この様に頼もしい臣下をもって、大変心強いわ！』
と、間に入って話を終わらしてしまった。

このやり取りを見ていた諸将の中には、違和感を感じていた武将がいたのである。

名人久太郎こと、堀秀政である。

彼は、小牧・長久手の戦いで家康軍と直接戦闘経験がある。
今、家康と激論を交わしていた秀次に従軍し、三河の本拠を迂回し、奇襲する作戦であったが、家康に見破られ、敗走、家康方の部将大須賀康高、榊原康政らが突出してきた所を、自軍3千を三面埋伏の計で挟撃走させた。

秀次は確かに、若さゆえ、短気な所もあるし、小牧・長久手での感情もあるだろう。

だが、諸侯の前で、こんな短慮な感情のぶつけ方があるか？
むしろ、この場では空気をわざと読まない振りをしているのでは？

家康殿関係で何かあったか？

ここに秀政は自分の考えを持ってきた。

ここで、秀長が口を開いた。

『遊軍としておる堀殿の軍勢、先鋒として、秀長めにお預け願いたい。』

秀政はいきなり秀長の発言に驚いた、素直に驚いた、自身の思考が、外の北条に向いてなく、現在の自身の疑問にぶれていた所に秀長の発言である。

少なくとも、現時点での秀政の立場は、遊軍の総大将である。

『いや、しかし秀長殿、それがしにもお役目がございます。』

秀政が言い終わらないうちに、秀次も、

『おお！それは良い考えです！！秀長殿！！』

と、合いの手を入れてきた。

すかさず、秀長が、

『今回の北条攻め、仕置き後関東は堀殿に治めていただくことになります。ぜひとも先陣にて、お役目ねがいたい。』

秀長が低調に秀政に頭を下げる。

この温厚な秀長が、静かな圧力をかけてくる。

先ほどの事と言い、何かあるのでは？

考え始めると同時に、秀政は力を込めた声で、

『小田原城攻め、先陣仰せつかまりまする！！』

と秀長に頭を下げ、秀吉も家康もニコニコと頷いていた。

しかし、家康の胸中は怒りに溢れていた。

豊臣政権に忠実で、自分よりも若く、有能な秀政という将は目障りなだけであった。

事前に、秀吉が秀政に、関東を治めさせる意向も直接聞いている。

この合戦中に病死に見せて毒殺するつもりであった、なにより遊軍というのが都合がよかった。

それを、諸侯の前で、関東経営の中心は秀政であると宣言されてしまった。

だから、今回の北条攻めに対し、関東の経営準備も極秘で進めていた事が無駄になってしまふ。

ある程度時間がたてば、娘婿の氏直に降伏の仲介に入り、一番勲功で鳴り物入りで関東経営に乗り出すつもりであった。

そして軍議が終わった後、秀長は秀次と秀政を呼び、密談を始めたのであった……。

小田原の役？

秀長は家康という男の暗部を、自身の体験と共に名人久太郎こと、堀秀政に語っていた。

秀長が予測するに、小田原攻めが終わった後に、邪魔になる親秀吉大名は秀政であろうと考えた。

なぜなら秀吉は、家康に直接関東の主な領主は秀政だと言いきっている事もある。

ただ、秀長が解せないのは、その家康自身も秀政を押しているのである（蒲生氏郷と秀政で秀吉は迷っていたらしい）が、伊賀者を多く抱える家康だが、甲賀者を多く抱える蒲生には裏工作は成功しにくい。

なら、組みやすい秀政なら……。

と、考えたのでは？

秀長の結論は正にそこに落ち着いたのである。

秀政はその端正に整った顔がみるみる紅くなり、こめかみに青い血管が浮き出て、今にも怒りで爆発しそうである。

『近頃、どうもおかしな出来事が多々あったが……。家康殿が……。』

秀政は家臣の人心掌握が上手な人物であった、この人は家臣を召し抱える際に今で言う雇用期間を設定して、能力を確かめたうえで採用条件を提示するという、戦国時代では一風変わったシステムであ

った。

しかも、ついてこれない者や、不始末を犯した者にでも、「奉公構え」にする事無く、お小遣いを渡し送り出すほどである。

しかし、秀吉と同じく出自が貧しくて、譜代の家臣も居ない秀政は、人材を欲しがっていた。

だから家中には、色んな出自の家臣が仕えている。

そんな秀政に、九州征伐中に陣所で事件が起きたのである、山下甚五兵衛という、陣控えの小姓であるが、突然、秀政の背後から斬りかかってきた事件があった。

只、この男の言葉訛りは三河訛りであつたと、尾張出身の小姓が言っていたのを思い出していた。

『考えれば考えるほど、おかしいことが良く起きていました。日頃、油断するなど自らを戒めておりましたが、情けない話です……。』言葉使いは丁寧だが、秀政の表情を見ると怒りに震えているのが良く分かる。

『いらぬ氣遣いとお思いでしょうが、秀次の忍びを警護にお使いください。』

秀次は、かつて小牧・長久手での敗戦の教訓で、情報収集や、諜報活動がどれだけ大事か痛すぎるほど味わっていた。その中で、唯一家康軍を蹴散らした秀政に自身が手助け出来るという、奇妙な運命の巡り合わせを感じていた。

『秀次殿かたじけない……。その申し出ありがたく御受けいたします。』

かつては、気が強いだけの坊主が、今や立派に大将ではないか……。

豊臣政権も決して短命ではないな……。

秀政はふつと短い息を吐き。

『では、秀長殿、小田原城いただきに行きましょうか！！』

5月15日、日々過ぎていく時間の流れ、籠城側は、一日一日が、非常に遅速な流に感じられ、攻城側は、日に日に届く勝利の報告に駆け足の如く流れていく時間を感じていた。

両社に感じる時間差は、そのまま士気の差にもつながり、もはや北条側は、戦闘維持も難しくなっていた。重臣の内応や、家臣の動揺……。

しかも、何を考えているのか、投降兵や住民のことごとくを小田原に送ってくる秀長のやり方。

死ぬと思って戦い殺されずに、温かい食事を与えられ、本国へ送り返してくれる……。

そんな人間は、もう修羅にはなれない。

情をかけられれば、相手にも情で答えてしまう。

それが人間であり、どうしようもない本能でもある。

しかし、5月を過ぎ、中ごろになり、氏直、氏政親子は事の重大さに恐れおののいてきた。

『兵糧の減り方が尋常ではありませんね！1年分の備蓄が、もう底を

つきますぞ！！買い集めるにも、商人どもめ、高値につられて、豊臣軍に全て売り払いおった。」

氏直が、これがあなたの望んだ結果がこれですとの思いを込めて、氏政にぶつけた。

『しかし、この城は落ちん！謙信公でさえ落とせないこの城を、猿面冠者の弟なんぞに落とせるかよ！！！！』

この期に及んでも氏政は強気である。

『どうしても、まだあがきまするか？？』

氏直は半ば決心をした眼で氏政を見つめる……。

『ふん！実際奴らは臆病風に吹かれてせめてこんではないか！！それより部隊を編成して一泡吹かせようぞ？氏直よ！！』

がつはつは！！と笑う氏政。

氏直は決断を下さねばならなかった。

今なら、秀長、秀吉の連名で届いているこの書状の期限に間に合う……。

氏直は密かに板部岡江雪斎、成田氏長、北条氏忠、皆川広照など諸将を集め、最後の打ち合わせを始めていた。

小田原の役？（後書き）

次回、小田原最終話です。

戦描写などは、今回省きました。

小田原の役 最終話（前書き）

小田原の役終了です。

伊達政宗が登場します！

小田原の役 最終話

秀吉側から、北条氏直への降伏勧告はこの様な内容であった。

1・小田原城の引き渡し。

2・伊豆・相模・下総・上総北半・武蔵領地召し上げの上、上野・国安堵、川越城を本城と定める事。

3・氏政、氏照兄弟を高野山流罪。

4・一子である生姫を人質とする事。男子が誕生の場合は男子を人質とする。

5・北条氏規を堀秀政付けとする事。

6・この案を受け入れない場合は、北条家取り潰しの上、一族郎党厳罰に処す。

以上が条件であった。

ついに決意をした氏直は、板部岡江雪斎、成田氏長、北条氏忠、皆川広照などの諸将と共に、氏政、氏照を捕えにうごいたのであった。

『氏直！どういふ見じゃ！！！！』

太刀を振り回し暴れる氏政は息も切れ、目は殺気立っている。

『父上！これ以上は是非もなし！後北条家名を残さなければならん』

のです。秀長殿は、誰の命も望んでおらず、父上と、叔父上の流罪で和議がなるのです！！」

氏直は悲しみを胸に秘め、北条家の当主として、今しなければいけない事に向かつて、一寸の迷いもなかった。

『この日光一文字、父上の血を吸いたがっておりませぬ。どうか、どうかお縄に召してくださいませ！』

日頃見た事のない覇気を氏政は、氏直に見た。

いつも自分の言うとおりに物事を差配していた氏直とは違う空気を感じた氏政は、太刀を鞘にしまい、腕を組んだまま床に座り込んだ。

『北条家当主は氏直じゃ、好きにせい。』

そして、不思議と笑いが込み上げてきた。

氏政にしてみれば、氏直を思つての行動も、ひよつとしたらいらぬお節介で、自分は早々に引っ込んでしまえば良かったとも思った。

氏直は北条家の武装解除を伝達し、氏政、氏照、氏規を伴い、秀吉に接見した。

秀吉を筆頭に、秀長、家康が脇を固め、戦国に生きる男なら、誰でも耳に入ってくる名前の部将たちが周りに連なっている。

陣所に入るなり秀吉が顔をくしゃくしゃにし、氏直に歩み寄る。

『これはこれは左京太夫殿、よくぞご決心なされた！！』

そして、縄に繋がれている氏政、氏照を見るなり、

『これこれ、お二人の縄をほどうして差し上げる、失礼はいかんわ。』
と、芝居くさい大げさなりアクションで動き回る。

そして、打って変わって冷徹な表情で氏直に向い

『大和納言に感謝するんじゃない、余は氏政殿、氏照殿の首は頂くつもりじゃったが、大納言が、寛大な処置をと申すのでな……。』

そこに家康が割って入る。

『殿下の寛大な処置、この家康は頭が下がります！氏直殿は、我が婿でもあり、家康、かさねがさね御礼申し上げます！』

今回の戦で、徳川家は見せ場がほとんどなかった。

もっぱら、戦功を上げているのは別働隊の面々と、水上封鎖軍、北方軍、秀長本軍であった。

一応家康も軍団を形成し、小田原城を包囲していた。

それだけではなく、本多正信、服部正成に命じ、彼の配下の伊賀同心を使い、謀略工作に動いたのであるが、風魔衆や、他の何者かによって、ほとんどの忍びの消息がつかない。

自身の存在を見せ付けるため、あえて秀吉の次に声をあげたのである。

『はっはっはっ、まあ確かに、武蔵大納言の婿どのじゃのう？』

秀吉は下から覗き込むように、家康の顔を眺めた。

『氏直殿、これからの働きによつては上野だけではなくさらなる増もござろう、また家臣の録も減らさなければならぬ、お困りになるのは必定、家臣、国人もし良ければ、堀殿にお預けいたしませんか？』

秀長は、これから減俸になる北条が、現状の家臣団を養えない事に

なる。それを、秀政に預ける事によって、関東の支配を秀政筆頭に親豊臣で固めたかったのである。諸侯の列に座る秀政が大きく頷く。

家康が何か言いかけるが先に、氏直が、

『堀殿！！！どうかお願いいたします！この度の事、家臣共に罪はありませぬ！どうかお願いいたします！！』

氏直が、降伏にあたっての最大の懸案事項が、家臣、国人の処遇であつた。

何せ、5分の1に領地が減るのである。

どれだけ見積もっても、家臣の半分以上は武蔵に連れていく事は出来ない、良政を民に施していた北条家の関東支配であつた、課税率も戦国一の低さである。

当然家臣たちも切り詰めて生活をしているのであつた。

『そうじゃ、そうじゃ、秀政殿には関東を治めてもらわにやいかん。

伊豆・相模・武蔵合わせて100万石じゃ！』

秀吉はいたずらっぽい顔で秀政を見た。

秀政も、関東で50万石位の領有は皮算用で見積もっていたが、100万石とは……。

流石の秀政も驚いた表情を見せ、

『はは！殿下の仰せのままに！』

と、秀吉に頭を下げ自身の重大な役割に気づいたのであつた。

この少し前、会津黒川城では奥州の雄である伊達政宗が一通の書状に目を通していた。

『三河の家康殿は何と？』

政宗の軍師であり、もつとも信頼する家臣の片倉 景綱が政宗に問う。

それに対し、政宗は・・・・・・・・。。

何やら、あわただしく本陣近くまで馬が駆けてくる。

転がり落ちるように、伝令将校が本陣に駆け込む！

『伊達政宗！！拳兵の様子、領地に動員をかけ、戦闘態勢に入りましてございます！！！！』

諸侯が一樣に目を光らせた。

戦は、知行を増やす一番のイベントである。

その中で、不気味な笑みを湛える男がいた・・・・・・・・。。

東海の覇者、徳川家康である。

伊達と最上

秀吉に北条家が屈したところ、伊達軍が最上領になだれ込んできた。この血縁関係にある伊達と最上、事あるごとに争いが絶えない。最上義光の妹である義姫（保春院）は紛れもない伊達政宗の母である。

この義姫、此度の小田原の役の最中に、政宗を殺害し、弟の竺丸を当主に据えようとしたと伝わっているが、当時竺丸は勘当されており、史実的には誤りだとされている。

だが、生家である最上家と対立姿勢を鮮明にする政宗とは馬が合わない事は事実で、後に最上家へ逃亡をする事になる。

伊達政宗は決断した。

家康の書状によると最早手遅れで、先に秀吉と誼を通じていた最上に奥羽討伐の命が下るとあった。

ならば、当主の居らぬ隙に出羽を掠め取ろうと、足がかりになる拠点長谷堂城に兵を進めた。

自身の右腕が片倉景綱であれば、左手のあの男に威力偵察には多すぎる三千の兵を預けて……。

もちろん最上方も黙って侵略を許すわけもなく、笹谷峠にて、伊達軍を迎え撃つ。

『かかれ~~~~~!!!!!!』

『死ねや!!!!!!死ねやあ!!!!!!』

ムカデの前立ての兜をかぶり、十文字の槍を馬上で振るう武者が進むたびに道が出来て行く。

男は戦場でつぶれた声を絞り出し、獣の様な雄たけびを張り上げる。

その光景が、最上方の志村光安の目に焼きついて、歴戦の武将である光安の闘争本能に火を付ける。

『いつまでも彼奴らに好きにさせるなよ』

つぶやく光安が睨みつける視線の先には、伊達家の猛将、伊達成実が猛威を奮っていたのであった。

『長槍隊かわせ！鉄砲隊押し出せ！』

光安の号令で、長槍隊が左右に展開し、中央に道を作る。する手相手は穴の空いた所に吸い込まれていくが・・・。

『一時引けや！』

成実が、突出しようとした軍を50メートルほど引かせる。

『槍隊、槍上げ！！』

槍隊が長槍を頭上に挙げる。

この距離では鉄砲は届かない。

それを見て光安は、長筒隊を持ってこさせる。

『構え~~~~~』

『放て~~~~~！！！！！！』

通常より火薬を増やし、銃身を1.5倍に伸ばした長筒より、銃弾が発射される。

この当時の鉄砲は現代の銃身内に刻まれている線条が無いため、運動エネルギーの効率が悪い。

で、あるから射程を延ばすには、銃身を延ばし、火薬を増やさなければならぬが、これの見切りを誤ると、暴発に繋がっていくので、取扱いに注意が必要になってくる。

百丁の長筒より火線が延びて行く、届かないはずの銃弾が届いた心

理的動揺は大きい。

槍隊に乱れが生じる隙を見逃さず光安が吼える！

『槍隊！掛れや～～！突けや～～～～！！！！』

振り下ろした槍をそのまま突いていく最上勢。

予想以上の手ごわい相手に伊達成実は舌を打つ、

『最上に楯岡満茂、延沢満延ありと言われておるが、こ奴も中々やりおるわ』

まさに延沢満延が義光の共に秀吉へ接見に向かっている留守を狙ったの進軍であつた。

そうこうして居る内に、手勢が削られていく……。

いったん引くしかないか……。心でつぶやく。

それにしても、この屈辱忘れんぞ！！

伊達の猛将、伊達成実は退却の命令を出し、本軍に合流すべく、兵を引き上げた。

志村光安、史実では長谷堂にて上杉軍を破った勇将である。

天下騒乱

家康は笑いが止まらない・・・。

自分が今どの様な状況に居るのかを、理解しているのはどれくらいの人がいるのだろうか？

現在、豊臣勢は熊野水軍を先手とし、伊達討伐に動き、陸路からは豊臣秀長、豊臣秀次、蒲生氏郷、堀秀政、北条氏直等、10万の軍勢が佐竹領、常盤を通り、奥羽へ向い、北国勢は上杉景勝、前田利家、真田昌幸ら5万人が出羽より侵攻を始めていた。

徳川家康は、後詰めとして、2万5千人の手勢を率い、秀吉本軍と共に水戸城に詰めている。

秀吉自体、現在は旗本衆など直轄軍は1万2千人ほど、家康はさらに駿府に1万もの軍勢が控えている状況である。

家康がその気になれば、領地に動員をかけ、4万を優に超す軍団を動かせるのである。

当然、秀吉も抜かりはない。

牽制として、尾張に織田信雄が1万の兵を待機させてある。

只、秀吉が間違いを犯したとすれば、織田信雄を尾張に入れた事だろうか。

この織田信雄という人物、現在は自分が主家筋というのも忘れているのかという程、秀吉に従順な武将になっている。

一度家康に誘いを賭けて、秀吉と対決したが、自身の領地を攻めら

れて、早々に秀吉と和を結んで家康を呆れさせた事のある男である。信雄はこの度の北条合戦で、伊豆侵攻軍として手柄を多く挙げ、大きな加増を勝ち取るはずであった。

しかし、伊達家が恭順を拒んだため、戦後処理が整わない内に新たな陣ぶれである。

しかも今回はどう考えてもお留守番役、これ以上旧主家に加増は望まないと秀吉の意志表明にもとれた。（実際は、畿内、東海道の抑えとしての清州城の戦略的意味の多さにあるのだが・・・。）

家康の眼は信雄に向いていた。

家康の考えでは、現在の状況を逃せば、このまま豊臣政権に組み込まれ、埋没するのは目に見えている。

『もう、耐えに耐えたよ・・・』

ぼそつと家康がこぼすと、その意を汲み取り本多正信が遠くを見つめながら、

『公家は今そこに居てる人になつきますからなあ。』

と、第3者が聞いたら意味不明なやり取りを交わしていた。

正信は家康の野望を良く理解していた。

この戦国の世に生まれ落ちた時から、耐えに耐え、忍びに忍んできた主君は、嫡男を同盟相手、織田信長から、切腹せよとの理不尽な要求をも受け入れて、徳川家を守るために耐えたのである。

いつそ、関東でも貰えたら、畿内より遠いので、いらぬ疑いや、警戒心を持たれる事もなく、内政、軍事両面に力を入れただろう。

が、なんせ三河、駿河は近すぎる。

これは攻めるのもそうだが、攻められるのもそうであり、この場合後者の意味合いが強い。

しかも秀長は、自分の野望を感じている。

家康は正直、この秀長が恐ろしい、秀吉も当然恐ろしいが、秀吉の怖さは自分の予想を上回って困い込もうとする意外性を伴った人たらしのすべである。

秀長の恐ろしさは、戦略的、戦術的戦闘のうまさである。

彼は、おそらく戦国期において1、2を争う名軍師「竹中半兵衛」に師事し、そのほとんどを吸収してきた。（事実、半兵衛は、秀吉と過ごす時間より秀長と一緒に過ごす時の方がはるかに多かったのである。部将として、秀長の急成長に半兵衛の影響力は大きいのは事実であつたし、秀長の部将としての資質を見抜いた信長は直臣に取り立てて、秀吉の与力としてつけている。）

なんせ合戦に負けない人である。

彼が公式に負けたとされるのは、別所攻めの時に淡河定範が籠る淡河城攻めにおいてのみである。（これも秀吉に強引な方策を取らされての負けである）

『秀長が健在なのが不安要素ですが、頭を落とせば状況は変わりますよ』

正信は家康が懸念している事をさらりと言い当てた。

『正直5分の博打は嫌いではないがね』

家康はふふふとおどけて見せた。

天正18年9月19日、時の関白豊臣秀吉、徳川家康家臣、本多忠勝に討取られる。

正に天下が再び動き出したのであった。

結末（前書き）

長期放置すいませんでした。

思いつきり内容が被った仮想小説があったので、放置してしまいました。

今回無理やり完結致します。

文面も第3者視点に変わります。

結末

秀吉が徳川家、織田家の反乱により討たれたのは、家康の焦りが多分に作用していました。

それは豊臣秀長暗殺を失敗し、秀吉を制する者を排除しようとした家康の目論見が破たんした事に端を発していると言われています。

家康がなぜ、秀長暗殺にこだわったのか、それは結果として如実に表れています。

秀吉違い、秀長は家康とほぼ同世代（3歳秀長が年上）というのは、家康に確実なプレッシャーとなっていたと思われます。

秀長暗殺失敗も反乱の一因として、なぜ家康はリスクを冒して豊臣政権に反旗を翻したのでしょうか？

それは、出自が大きく関係しているのではないのでしょうか？

家康は藤原氏を名乗ったり、源氏を名乗ったりしましたが、間違いなく三河地方の勢力頭であったのは間違いありません。

それに比べて、卑しい身分の出である秀吉を心から慕えなかったのも無理はありません。

現実に信長の軍団長時代、播磨攻略後に秀吉の尊大な態度が原因で別所氏らに反旗を返されました。

これが明智光秀であれば、別所氏の反乱は無かったとも言われている

ます。

諸説を鑑みるとこの2説が有力だと言われています。

さて、徳川、織田両勢力が秀吉を打ち取り、天下が乱れるかと思われたのですが、民衆は戦乱の終わりを願っていたのでしょうか。

まずことの発端となった北条攻めでしたが、意外にも豊臣家と共にする決断を下します。

この北条家が関東に返り咲いたのは、家康との決戦を前に、一揆勢力の抑え込みの功が大きく評価されているのです。

奥羽攻略中の中の撤退はリスクを背負うと思われましたが、伊達家はあまりにも周りに敵を作りすぎました。

反伊達勢力らが扇動し各地で一揆がおこります。

北陸方面軍勢は上杉景勝、前田利家、真田昌幸に加え最上勢ら東北勢を加え8万人の大軍勢により一気に伊達領を飲み込みます。

尚、伊達家当主政宗は母である義姫が兄、最上義光に助命嘆願し、領地召し上げの上紀州九度山に追放となる。

秀長自身は、陸路関東より駿河に侵攻し広大な野戦陣地を構えた家康、信雄軍と対峙し、戦線は硬直したが、海路より秀次率いる別働隊により攻められあつてなく敗退し、信雄は秀長軍に降伏、家康は駿府城に退却する際に、別働隊の将、藤堂高虎隊により打ち取られる。

この時豊臣家に養子に出された事もある結城秀康は見事に豊臣家に忠義を果たし、徳川四天王である井直政の赤備えを打ち破っている。この時直政は、徳川の血筋を守るために秀康に己の首を持って手柄とさせたと伝わっています。

本多忠勝隊は蒲生氏郷、堀秀政、北条氏直らに攻め込まれ、これを良く防ぎましたが、鉄砲隊による制圧射撃により落馬し、蒲生氏郷配下、蒲生郷舎により打ち取られる。

徳川家の主だった将達はことごとく討ち死にしました。

そして、家康の遺体のそばには本多正信の遺体が家康を守ろうと手を覆いかぶさる様に果てていたと言います。

その後の事は、周知の通り、時の関白豊臣秀次が大阪を中心になにわ文化を咲かせました。

その後豊臣政権は、中央集権を強化し、朝廷による摂関政治を続けました。

そうですね、秀吉の最愛の弟であり、部下でもありあった秀長は内大臣として秀次を支え続けました。

豊臣秀長と言う人はあくまでも人を立て、自身は補佐役としての人生を全うしました。

これがなにわ時代と言われる時代にいたるまでの背景でした。

結末（後書き）

かなり強引な終わりです。申し訳ないです。
最後まで見ていただいた方々どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6693i/>

豊臣秀長 長寿伝

2010年10月9日01時28分発行